
悠久セレナーデ

本凪 夕李

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悠久セレナーデ

【Zコード】

N7249M

【作者名】

本凧 夕季

【あらすじ】

「好きです。」男子校に通う俺、春川柚希にそう伝えてきたのは、れつきとした同じ男でした。

まつすぐな少年とやや強情な少年の恋愛模様。スロー・ペースな恋愛がお好きな人向けです。

登場人物紹介（前書き）

B L 作品です。

苦手意識のある方は閲覧を「遠慮ください」とよろしくお願いします。

大丈夫な方のみ先にお進みください。

登場人物紹介

春川 柚希

整った中性的な容姿故、生徒に告白されること数知れず。しかし本人はノンケ。

華奢だが力があり、運動もそこそこできる。

基本的にはクールというか、素っ気ない。ただし健太は特別。

三田 結斗

サッカー部所属のスポーツ大好き少年。勉強は少し苦手で音楽が好き。

人当たりも性格も良いが、少々気弱で強く出られない部分がある。

岸部 健太

柚希の親友。温厚な性格で、柚希の数少ない理解者。

運動は並の成績、勉強は得意。クラスの中では安定した信頼を得ている。

隨時増えます。

^ ^ ^ ^ 「あつ、あの……！」

昔から、変なものに好かれることが多かつた。

動物にも好かれる。少しばかり変わった人間にも好かれる。

天性なのよ、と幼い頃に母親に言われてしばらくは誇らしく思っていたこともあつたけど、今はそうでもない。所詮、変なものは変なものだ。たまに周りの日が冷たくなることだってある（動物ならまだしも、人間は特にな……）。

「何？」

「俺、三田結斗つていいます！その……つ、俺と、付き合つてください！」

「…………は？」

ほら、また変なのがきた。

*

がやがやと騒がしい廊下。にも関わらず、三田と名乗った奴の爆弾発言によって視線は全てこちらに向けられている。居心地悪すぎだ。なんだなんだと興味本位の瞳が周りを埋め尽くす。

「…………」
「俺のこと、知らないかもしれないけど……実は俺、ずっと前から……」

つ！」

「なに？ マジ告白？ さすがモテるな春川！」

野次の1人がそう囁し立てるに、周りは更に盛り上がりてしまった。爆弾発言した張本人は変にあわあわしてゐし、居心地の悪さは最高潮。

「えっと…三田くん、って書いたつけ？」

「あ、うんー三田結斗ー」

人当たりの良さをうな笑顔を浮かべて、三田は自分の名前をもう一度言つた。

「三田結斗、ね。とりあえずぶつ飛ばす

「え…」

三田が何かを言つ前に、三田の頬に向けて拳を振るつた。急なことで受け身さえも取れなかつたらしく、三田は盛大な音を立てて壁にぶつかる。

殴られた頬に手を添えながら、呆然とした目が向けられた。意味がわからない、そう書いてあるんじゃないかつてくらいの顔。

「悪いけど、俺そういう趣味ないから。他あたつて
「ちよつ、春川！ 待つて！」

三田の声を背中で受けつつ、俺はその場から足早に離れた。俺を避けるように人混みが割れる。また記録更新だな、という小さな声が聞こえた。

何が記録だよ。他人事だと思いやがつて。
俺の真剣な悩み事を、笑い話にいやがつて。

「可愛いやつとした一重の瞳。お世辞にもたくましいとは言えず、寧ろ逆に華奢な身体。運動はできるのに白毛を保っている肌。地毛にしては明るめの髪。

俺には男を主張する要素が昔から少なかつた。

可愛い、可愛いと周りは口を揃えて言つ。それはいつまで経つても変わらなくて、俺はそれが嫌だった。

大きくなつたら、と未来に願をかけた所で思つたようにたくましくなる訳でもなく、高校まで進んでしまつた。

何を思つたか男子高に進んだは良いものの、男だらけの空間では逆に自分の華奢さが目立つてしまつ。

進路を安直な考え方で決めた過去の自分を呪いたくなつた。

そしてただの都市伝説だろうと思つていた男子高の同性恋愛。それは決して嘘ではなく、生徒の中で限りなく女に近い俺は多くのタチ側のターゲットになつていて。死にたい。俺はノンケであることを主張するべく、告白というものをしてきた奴全員をフフしている。さつきの三田のように、強い拳を添えて。男なら拳で語れ…つていうのはただの建前で、ただの苛立ちを具現化したものとも言える。「俺、そんなに男受けいい顔してる?」「さあ?まあ、可愛いのは否定しないけど」「健太も結構酷だよね…」「俺は事実を言つただけだよ」岸部健太。もう小学生からの付き合いになる。「長いこと俺の傍にいたせいか、俺の苦労

をわかつてくれる数少ない理解者だ。^b_r^v^b_r^v「何のため
にあんな断り方してると思つてんだよあいつら…」

「そういえば、春川柚希のツンデレは攻略し甲斐があるとかいう噂

聞いたなー」

「なにそれ！？」

誰だそんな噂流した奴。俺が直々にぶつ飛ばしてやりたい。

頭を抱える俺に小さく笑つて、よしよし、と健太は俺の頭を撫でた。

「大丈夫。柚希がかっこいいこと、俺知ってるから」

「健太あ…！」^b_r^v^b_r^vホントこいつはイケメンだ。俺が
女だったら惚れてる。あくまでも、女だったら。^b_r^v^b_r^v
ありがと、と口にしようとした瞬間、教室に俺の名前が大きく響い
た。^b_r^vしかもその声は、ついさっき聞いたばかりだったよう
な。^b_r^v^b_r^v「春川っ！」^b_r^v「…三田、結斗？」^b_r^v
^b_r^v^b_r^vついたつを殴つてフツたはずの相手は、小さく息を
弾ませてまつすぐ俺を見ていた。

友達になつて

「三田は少しだけ気まずそうな表情を見せた後、意を決した
よつた瞳をして俺に近付いてきた。

「あの、春川……」

「何?」

「さつもの」と、少し話したいんだ…時間、ない?」

おずおずと問われる。どうしたもんかと考えていると、とん、と健太が俺の肩を叩いた。

「いいんじやない? 話くらい聞いてあげれば?」

「お前、仮にも親友だろ。心配じやないの?」

「三田はそんな奴じやないよ」

ね、と三田本人に笑いかける健太。三田は少し驚いていたみたいだけど、やがてぶんぶんと首を縦に振った。

…まあこざとなつたら逃げればいいよな、なんて。

「…わかつた、いいよ」

「あ、ありがと。じゃ、少し春川借りるね」

「ん。いつでらつしゃい」

俺は貸し出し可能物か。

そんなことを思つ俺を知つてか知らずか、にこにこと微笑む健太に見送られて俺は三田の後について教室を出た。

*

「…で、話つて？」

切り出したのは俺の方。
人気の少ない中庭に連れて来られ、俺は正直何の話なのか見当もつかなかつた。

付き合つて欲しいつていう件なら一警して帰ればいい。けど三田の表情は少しばかり神妙だ。

「えつと…せつきの」と、で

「うん」

「その…」めん

「……ん？」

「だから、『めん』。後で冷静に考えてみたら、急にあんなこと言われたら普通引くよなつて」

俯き加減のまま、三田は呟くように言った。

この言葉は少し予想外で、俺は何も言わず黙り込む。
「つでも、さつき言つたことは嘘じやないんだ！俺は本当に春川が好きで…」
「うん、じゃねえ。何を1人で納得してんだこいつ。

しかしこの雰囲気でそんなことを言えるはずもなく、俺はただ三田

の顔を見つめるしかできなかつた。

「…一つ、頼みがあるんだ」

「頼み?」

「うん」

反復するように答えると、三田はしっかりと俺の瞳を見た。真剣な視線に、ちょっととした緊張感を覚える。威圧されたような感覚。

次に三田の口が開いた時、俺の身体は少しだけ強張つた。

「頼む！俺と、友達になつてくださいっ！」

「…………は？」

強張つたはずの身体からはすぐに力が抜け、俺は告白された時と同じリアクションをとつてしまつ。

なんなんだ、この男は。

新しい友達

「…何言つてんの？意味わかんないんだけど」

「あ、いや、その、俺このまま春川に避けられたりすんの嫌だから…」

…」

聞いてみれば、随分と身勝手な理由。

三田は焦ったように、ああでもなこといつでもないと言葉を探していく。

「…ホントはちゃんと場数を踏んで言わなきやつて思つてたんだ。でも、こりゃ春川と向き合つたらテンパつつけつて…」

殴られた後に「…」と間違えたつて気付いた、と呟く。

…」「…」、実はすぐバカなんじゃないか。

「絶対何もしないから…好きだとか言わないし、変な目で見たりもしない！だから、その…」

一度伏せられてすぐに戻った瞳には、不安の色が見えた。

しかもそれはまっすぐ俺に向けられている。

「俺と、友達になつてくれませんか…？」

「こんなのずるい。まるで泣き落としだ。」

こんな状況で断つたら、明らかに俺が酷い奴じゃないか。

誰に見られてる訳でもないはずなのに、俺の心には断ることに関する罪悪感が積もる。

「…それで、あわよくば俺が自分を好きになってくれたらってこと？」

「…それは…完全に否定はできない、けど」

「…」

「でも俺、ホントに…。」

はあ、とため息を吐く。三田が肩を震わせて黙った。

「…いいよ」

「…え？」

「友達になるくらいならこよつて言つてんの」

三田は俺の言葉に呆然としたまま動かない。

眉をひそめると、まつとじたように顔色が変わった。

「え？え？ホントに？ちょっと、これ夢じゃない！？」

「は？三田、まず落ち着け」

俺の言葉も聞かず、三田はぎゅうつりと自分の頬をつねる。

よつほど加減せずにつねったのか、すぐに頬を押さえてつねりまつてしまつた。

「い、痛い……！」

「セリヤセリヤだらー何やつてんだよお前！何か怖い！..」

俺がそつぱいつと、三田はみくじ顔を上げて笑つた。
わつかの痛さのせいか、ほんの少しだけ涙目になつてゐる。

「へへ…やっぱい、超嬉しい」

「…………」

そこひまで嬉しさうに微笑まれたら、なんか照れるだろ。

そんなことを思いながら、俺は三田に手を差し延べた。三田はその手を掴んで立ち上がる。

近距離で、三田の笑顔を見た。

「ありがと、春川」

「……応言つとく。俺は絶つ対に男なんか好きにならないからなー..」

「ん。大丈夫、頑張るよ」

「違つだろー！」

やつぱり俺は、変な奴に好かれるらしく。

親友と新友

♪ ♪ ♪ 翌日。

「春川！一緒に食べていい？」

「おー。いい？健太」

「…いいけど」

私も当然のように教室へ来た三田に、健太は驚いたみたいだった。
じつと不思議そうに三田を見る健太。三田は小さく首を傾げ、何？
と尋ねた。

「いや…何、付き合つことにしたの？」柚希

「違うよ。友達」

「…友達？」

訳がわからないと言わんばかりの声色で健太が反復した。

「春川に俺の我が儘きいてもらつたんだ。俺と友達になつてくれつ
て」

三田がそう言つと、ふーん、と健太は頷いた。

その視線は三田から俺に移ってきて、じつと俺を見る。

「…なに？」

「いや、別に。えつと、俺は岸部健太ね。ようじく」

「三田結斗…ようじく」

「…？」

健太の反応を変に思いつつ、俺は匂い飯のパンの袋を開けた。

今まで話したことがなかつたから知らなかつたけど、三田は結構気さくな奴で、それなりに評判もいいらしい。

話してて面白いなあとと思うことも割と多く、でも思つてたより温厚な性格みたいだ。

「そういえば三田、サッカーやつてんだって？」

「ああ、うん。運動するのが好きなんだ、俺」

「柚希、1年の三田つていつたらサッカー部のホープだよ」

「え、そつなの？」

「それは周りが勝手に言つてるだけで……岸部、変なこと言つなよ

！」

三田は照れたように頬を赤く染めながら少しだけ声を荒げる。
褒められるのが苦手なタイプなのか。

パンにかじりつきながらそんなことを考えると、健太がまた口を開いた。

「柚希、今度サッカー部の練習見に行こうか。三田が参加してる時

に

「んー……でも午後の部活つて校外の生徒が来てるじゃん。しかも女子ばっか」

黄色い声なんて聞こえるはずがないうちの学校で、唯一耳にする時

間は午後の部活だ。

野球、バスケ、サッカー。

そういうつた運動部には必ずと言つていいい程に女子が歓声を上げている。

「三田くーん、とか可愛い女子に呼ばれてんじゃねえのー？」

「まあまあ、それも面白そうじゃない？」

俺のからかいに苦笑いだつた三田の代わりに、健太が答える。

行こうよ、と続いた言葉に俺は了承した。

「そのうち気が向いたらな

「え、ホントに来るの？」

「行くよ。何、見られて困ることでもしてんの？」

違つけど…と歯切れの悪い考え方をする三田。

意味がわからなくて健太を見ても、どうやら健太はわかっているようでくすくすと小さく笑うだけだ。

「大変だな、三田。めげずに頑張れよ

「…他人事だと思ってるだろ」

「だつて他人事だし。ね」

ね、と言われても、俺には何の同意を求められたのかがわからない。

とりあえず、三田と健太は仲良くなれそつだと頭の隅でぼんやり思つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7249m/>

悠久セレナーデ

2010年10月28日00時44分発行